Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-17

宝塚歌劇の二次創作に関する研究の方向性を考える：ファンサイトSの調査に基づいて

張，嘉慧

(Citation)
年報Promis,2(1):49-64

(Issue Date)
2024-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100489201

〈論文〉

宝塚歌劇の二次創作に関する研究の方向性を考える
――ファンサイト S の調査に基づいて――

The Direction of Research about Fan Fiction of Takarazuka Revue: Based on the Research of Fansite S

張　嘉慧
CYOU Kae

要旨

RPS（Real Person Slash、RPF ともいう、日本で言う「生モノ」）―― すなわち「架空の人物ではなく、実在の人物について描かれたファン・フィクション」（Fanlore 2023）―― は、二次創作のカテゴリーの一つで、「非常に物議を醸し、論争的」(Thomas 2014:171) なグレーゾーンとして発展している。本論が注目する「宝塚歌劇の二次創作およびそのコミュニティ」には、宝塚歌劇のモットー「清く、正しく、美しく」に関わらず、実在の役者同士の関係性を恋愛化・性愛化にするケースが数多く見られる。「女性による女性同士の関係性を扱う二次創作・コミュニティ」として、宝塚歌劇の二次創作とそのコミュニティは、これまでの他のジャンルの二次創作とそのコミュニティと同じ特徴を持つのだろうか。本論は、宝塚歌劇の二次創作を専門対象とした非公式ファンサイト「サイト S」を調査対象にして、これらの二次創作とそのコミュニティの社会的な意味と研究の方向性を検討する。

キーワード

宝塚歌劇、二次創作、RPS、フェムスラッシュ、ファンサイト

I　はじめに

2024 年、兵庫県宝塚市に本拠地を置く、独身女性だけで構成され、世界でも珍しいエンターテイメント集団、宝塚歌劇が創立 110 周年を迎える。宝塚歌劇は「清く正しく美しく」をモットーとして掲げていることで有名だが、既存の世界観や人物など利用し、新しい作品を作り出すファンによる二次創作の中で、キャラクター同士や生徒（宝塚歌劇の役者のこと）同士の間の絆には、性的欲望が付与されることがしばしば見られる。たとえば、二次創作小説の投稿が多数集まるコミュニケーションサイト「pixiv」において、成人向けを意味する「R-18」タッグが付いている宝塚歌劇の二次創作小説は 342 件（2023 年 8 月 1 日時点）ある。この点は、そのモットーと明らかに矛盾している。さらに、「二次創作」の先行研究では、「女性による男性同士の関係性を扱う作品・コミュニティ」を対象にするものが大多数で、宝塚歌劇の二次創作のような「女性による女性同士の関係性を扱う作品・コミュニティ」はこれまでほとんど対象とされてこなかった。では、宝塚歌劇の二次創作の特徴は、先行研

究で示した二次創作の作品・コミュニティの特徴と同じだろうか、異なるのだろうか。
これらの問いに答えるため、本論は、宝塚歌劇の非公式ファンサイト「サイト S」に載せる二次創作と読者コメントの内容を確認する上で、サイバー空間でのコミュニティ観察、およびサイトの創立者への聞き取り調査を実施した。以上から、宝塚歌劇の二次創作の作品とコミュニティの実態を探り、その研究の方向性について議論していく。

II　RPS の始まりと二次創作に関する重要な議論

2.1　RPS の始まり

これまでの 30 年間、二次創作に関する研究の蓄積が進んでいる（許、張　2023）。その系譜には、ジェンダー・セクシュアリティ（Jenkins 1992）、言語使用（Zhang 2019）、コミュニティ、消費形式（大塚 1989・東　2015）、ファンダムの政治と公権力・公的文化の関係（Ge 2022、Zhou 2017）などに関するテーマが含まれている。ところが、ファン・フィクションの一分野としての RPS（Real Person Slash、RPF ともいう、日本で言う「生モノ」）—— すなわち「架空の人物ではなく、実在の人物について描かれたファン・フィクション」（Fanlore 2023）—— は、長年、「ファン・フィクション研究者からもほとんど無視されてきた」（Thomas 2014:171）。近年、ファンダムと同人文化の隆盛とともに、RPS を対象にした研究がようやく増加する傾向が見られる。

ファンコミュニティの資料サイト Fanlore によれば、欧米系のファンによる RPS は、少なくとも 1960 年代後半から存在している。同サイトに最初のファンによる RPS として挙げられたのは、1968 年に『スタートレック（Star Trek）』の人気ジン「スポックナリア（Spocknalia）」に載せられたファン・フィクション「奇妙な惑星への訪問 (Visit to a Weird Planet) 」である。プロフェッショナルファンダムにおける RPS の初期のファン批評は、1985 年にレタージン The Hatstand Express の第 7 号に掲載された。この文章では、実在の人物の関係の二次創作について、「危険なだけでなく、無作法と悪趣味の極み」でもあり、「名誉毀損」同然であると評された。そのほか、1970 年以前に二次創作に現れた自己挿入（self-insertion）[1] と 2000 年ごろに生まれたとされる夢小説（reader-insert）[2] などのカテゴリーからも、RPS の作品が誕生し続けている。

一方、日本の RPS の系譜に関する学問的な研究の蓄積は少ない。先行研究として、ジャニーズファンの活動を研究した陳怡禎は、男性アイドルのプロデュースを中心とするジャニーズ事務所の芸能人同士の関係性を題材にしたファンによる「カップリングゲーム」——「J 禁」について言及している（陳 2014）。日本では、「J 禁」（「ジャニーズ事務所が閲覧することを禁止する」の略）、またそれと並んでよく使われる言葉「P 禁」（「一般人禁止」の略）の字面通り、このような RPS が著作権、肖像権、および「二次創作が原作本人に迷惑がかかる」と主張し、二次創作者に自重を勧める「ナマモノ赤軍」（椎名　2016）が目にするようなトラブルを引き起こす恐れがあるため、パスワード制、クイズ制、URL 請求制のサイト、および直接対面する同人誌即売会での販売という形を通してのみ流通していて、高い自閉性を表している。

欧米の RPS の始まりから約 30 数年経ったが、RPS は名誉権、著作権など、法的制度とも衝突するため、いまでも「非常に物議を醸し、論争的」(Thomas 2014:171) なグレーゾーンとして発展している。しかし、

1　作者が自分を登場させる二次創作。

2　主に「好きなキャラクターや有名人と恋愛をする創作作品」を指す。

サイバー空間の発達に伴い、二次創作はしばしば原作の売り上げを伸ばす効果を果たしている。そのため、RPS に対し、有名人や原作の著作権者は、理解を示したり[3]、面白がったり[4]、法的措置を講じたり[5]、商売を促進するため便乗したり、実際に二次創作に参加したり[6]するなど、さまざまな反応を示している。

2.2　二次創作に関する重要な議論

欧米系のファンダムにおける最初のフェムスラッシュ（Femslash、女性同士の関係性を描く二次創作）と思われる二次創作は 1970 年代半ばに、『スタートレック』のファンダムで現れたと考えられる。そして、『ジーナ』（1995 年～ 2001 年）、『バフィー』（1997 年～ 2003 年）、『L の世界』（2004 年～ 2009 年）の三つの TV ドラマのファンダムから数多くフェムスラッシュが生じ、このカテゴリーを発展させた（Afterellen.com Staff 2006）。

とはいえ、二次創作を対象とした研究において、フェムスラッシュを対象にした先行研究は極めて少ない。既存の研究には、ジェンダー・セクシュアリティ、人種などのイシューについて論じている。たとえば、『プラダを着た悪魔』(2006 年) などの映画・TV ドラマのフェムスラッシュにおける性的描写を収集、分析した Emily Coccia によれば、これらのフェムスラッシュは、喜び、欲望、親密性をヘテロノーマティヴィティ、ホモノーマティビティ、生殖器による性行為など主流の空間と実践から解き放ち、多様な快楽を作り出していると論じる（Coccia 2022）。一方、Maria Villa-Montoya らは事例研究を通じて、フェムスラッシュにヘテロノーマティヴィティの影響が見られると指摘している。この論考によれば、フェムスラッシュの作者は、「同性同士に恋心を抱く」ことに自責の意識を持っているという。そして、これらの作品に見られた女同士の関係性は「崇高な体験によって構成され、エロティックな衝動から離れた」（Villa-Montoya.M & Montoya-Bermudez.D & Escobar.J 2019:75）プラトニック・ラブとして描かれたが、肉体へ注目する作品と同等のテンションを生み出せると評する。だたし、これらの作品にはレズビアンへの啓発的な策を示していないとも指摘された。Coccia と Villa-Montoya らの研究は、それぞれの考察の対象が限られている可能性があるため、一見矛盾に見える結論を示している。その他、Jing(Jamie) Zhao は女性だけが選手となる中国の歌番組「スーパーガール」（2004 年～ 2006 年、2009 年）の RPS 作品を扱うファンサイトを対象にして、フェムスラッシュがいかに文化的に離れた背景の中でストーリーを語ることを通じて、「別の世界」を構築することを明らかにした。Zhao によれば、「非異性愛者を “ すでにクィアされた ” 社会文化的なコンテクストに置く」ことは、「洋の東西を問わず、大衆文化、とくにファン文化に広く存在する」。そして、Zhao はフェムスラッシュでのこのような「別の世界を作り出す」行為は「鬱陶しいクィアの現実に対処する遠回しな戦略」で

3　例として、2019 年に中国のミュージカル俳優アヤンガは、大学時代からの友人でもあるミュージカル俳優・鄭雲龍と自分をカップリングにした RPS に対し、「皆さんが思っているような方向ではないけど、私たちの関係はより親しいです。美しいことを想像したいのは良いことだと思います。(“ 我們没有你們想的那个方向，我們的情誼更深。你們愿意去想象美好也是很好的。”)」とコメントした。

4　例として、2012 年に、ポップ・ロックミュージシャンの西川貴教が X（旧ツイッター）で「自分が出てる BL の薄い本を並んで買ってみたい」と公言した。

5　例として、2003 年にファン・フィクションのアーカイブサイト FanDomination.net は野球選手アンディ・ペティット（Andy Pettitte）の法務チームから、彼に関する作品の削除を求める命令を受けた。

6　例として、2019 年、声優の関智一が東京ビッグサイトで行われる「コミックマーケット 97」に漫画家・conix 氏とともにサークルとして参加し、これまで演じてきたアニメキャラクターと関自身が BL をする『関智一のキャラと関智一が BL する本』を頒布した。

あり、「激しい苦悩と不安、および異性愛中心主義の中国社会におけるレズビアンの存在と生存への強い関心」を表す手段と論じる（Zhao 2017）。しかし、近い社会環境と時代に置かれた本論の調査対象である宝塚歌劇の二次創作には、このような「別の世界」を構築する傾向が見当たらない。本論は、これらの論点を踏まえ、論考を進めている。

本論の対象は「女性による女性同士の関係性を扱う作品・コミュニティ」ではあるため、その特徴が男性の主人公を扱う二次創作の作品とコミュニティと異なるが、二次創作とその主体として共通する特徴があると考えられる。たとえば、男性バンドの RPS を研究対象とした Kristina Busse は、二次創作について、ファンが文字通り自分の空想を書き、共有する空間を提供し、有名人、物語、そしてそれらを書いている女性についてのコミュニケーションと交流の社会的空間を作ると主張する（Busse 2006:255)。また、BL 漫画のファンをテーマにした Fran Martin によれば、二次創作に関するコミュニティは「計り知れない想像力に満ちたエネルギーによって創造され、大部分が女性の参加者にとって大きな喜びと知的で感情的な関与を生み出す参加型の空間」（Martin 2012:365）を形成する効力を持つと考えられる。このような空間は、女性参加者のジェンダー・セクシュアリティに対する認識と、アイデンティティの形成に大きな役割を担うと考えられる（Welker 2006）。また、二次創作の生産は、女性参加者のコミュニティの親密な人間関係（鄭　2021）につながっていると論じられる。

この点について、前述した陳は、台湾ファンによる「J 禁」に関して、特定のカップルに限って消費し、「対象となる関係性を増殖させない」ことと、「仲の良さ」というポジティブな要素だけがとりわけ注目され消費されるという二つの「やおい」と異なる特徴を挙げ、このような高い価値が付与された男同士の関係性の消費によって、女性ファン同士の親密性も再生産されていると提示する（陳　2016）。また、陳の論考では東園子の宝塚歌劇に関する見解を援用した。宝塚歌劇とやおいの消費形態の比較考察を行った東は、宝塚歌劇の二次創作について言及していないが、宝塚歌劇とやおいの両方とも同性の間にジェンダー的な役割分担を設け、その疑似ジェンダーをまとった二人が恋愛を表現していると理解した。そして、この両者の関係が、それまで注目されてこなかった「親密な関係に対する女性の欲望」を浮かび上がらせることを明らかにした。生徒はファンの目から見て多層的な構造を持つアイデンティティによって支えられており、舞台上の関係・役割で代表される層がファンが想像する舞台裏の層に投影されやすいことも明らかにした（東　2015）。

前述した通り、女性ファンによる RPS には、複雑なダイナミックスを含むことが窺えるが、先行研究で解明したのはいまだにごく限られた範囲であったと言えるだろう。そのため、本論は、宝塚歌劇の二次創作に関する研究の嚆矢として、宝塚歌劇ファンによる二次創作、およびそのコミュニティに注目し、その特徴および歴史を探ることから着手し、欧米系以外の RPS に関する新しい視座を切り開くことを試みる。プレリサーチとして、本論は、以上の二次創作に関するコミュニティに絡みつく感情的な関与、また消費形態などの見解を踏まえて、宝塚歌劇の二次創作の内容、およびそのコミュニテイの形成と特徴を探るものである。調査の結果に基づいて、さらに「女性による女性同士の関係性を扱う作品・コミュニティ」としての宝塚歌劇の二次創作とそのコミュニティの社会的な意味と研究の展望を検討することを本論の目的とする。

III　研究方法

上述の研究目的に基づき、本論はまず、宝塚歌劇最初の二次創作の投稿先であったと思われる、

1930 年から 1932 年まで、宝塚歌劇の機関誌『歌劇』に現れた「女学校宝塚通信」と「令女欄」という投稿欄を調べる。

一方、現在の二次創作といえば、疑いもなくインターネットは蓄積がもっとも多いプラットフォームである。「pixiv」やアーカイブサイト「Archive of Our Own」のような全分野向けのプラットフォームでの宝塚歌劇の二次創作の投稿の数が多いが、このような公開プラットフォームは、匿名性が高いだけではなく、明確なコミュニティポリシーもない。また、参加・脱退も自由にできるため、参加者の間の関係性を観察することが難しいと考えられる。そこで本研究は、明確なコミュニティポリシーを持つ宝塚歌劇の二次創作を専門対象とした非公式ファンサイト「サイト S」を調査対象にして、サイバー・エスノグラフィーの参与観察法を用い、当サイトの投稿内容、およびコミュニティの状況を観察・記述する。ただし、今までのサイトでのファン活動を妨げないため、研究者の身分ではなく一般ユーザーとして参与観察を行った。研究期間は 2023 年 5 月末から 12 月上旬までとする。前半は初代サイト S に載せた 343 件の二次創作の内容を読み、それぞれの性質、物語の背景、カップリングの対象と種類などを整理、分類した。そして、読者から寄せたコメントの内容を読み、二次創作の内容とユーザー間の関係性を探ることを試みる。そのほか、ボランティアとしてサイト S のサイト移転に伴うデバッグ作業に参加し、二次創作を取り巻くユーザー間のやりとりの観察も行なった。最後に、2023 年 12 月 5 日に、サイト S の創立者 C に半構造的インタビューを行い、サイト S の設立と運営の状況、および二次創作のコミュニティの組織者としての経験について語ってもらった。

IV　調査結果

4.1 『歌劇』の投稿欄に見る宝塚歌劇二次創作の嚆矢

1930 年から 1932 年まで、『歌劇』に現れた「女学校宝塚通信」は、主に女学生たちが「女学校における宝塚に関した出来事や挿話や珍しく面白い話」を語り合う場である。「令女欄」は、女学生のファンが宝塚歌劇と生徒を慕う気持ちを語る文章の投稿欄である。両投稿欄は、いずれも 1932 年前後「誌上消息」「誌上・手紙交換」という女性限定の投稿欄にバトンを繋げていた。

「令女欄」の方から、エスの要素などの少女文化の性格と、文芸創作への志向を読み取ることができる。この特徴は、読者の作品を掲載する「詩壇・歌壇」コーナーからも見られる。この点は、宝塚歌劇の教育主義志向と、20 世紀初頭の少女文化の浪漫主義につながっていると考えられる。「令女欄」に載せられたファン・ライティングは、前述した通り、概ね宝塚歌劇や生徒への思いを馳せる文章であり、エッセイとレター形式の両方も見られるが、一人称視点で自身の思いを語る投稿がほとんどである。ただし、その中で、「ノンフィクション」と「フィクション」の境界線をぼかし、ないしフィクション作品へと発展するケースも見られる。

たとえば、1931 年（昭和 6 年）3 月号の「令女欄」に、当時の雪組主演男役の雪野富士子への、雪野ファンである妹の訃報を伝える投稿が載せられた。「富士子様 —— こその今宵私のたつた一人の妹は逝きました。丁度今宵の様に此の窓の下に宵待草の花がくつきりと夕闇の中に浮いてゐましたつけ、月かげ淡く星のまばらな夜でしたの」のあいさつから始まって、「緊張した一瞬時、死そのものゝ様な不気味な一瞬時でした。“さーよーなら、ふーじー子さーまー”あゝ妹はかすかに［くの字点］君の御名のみ口ずさみながら遂に黄泉の客と變りました。窓下の宵待草はいつものやうに露にぬれてゐるのでした」(由富子　1931:39) で終わる、極めて耽美な筆致で妹の死を細かく描く投稿は、「芸術創作」

の性質が強いと言えるだろう。

さらに、1931 年（昭和 6 年）3 月号と 7 月号の「令女欄」に、それぞれ実在の生徒を扱う RPS が見られる。「果物と小夜さんと小猫」と「四季と巽さん」をテーマにしたこの二つの投稿は、いずれも投稿者の想像した日常生活における生徒の姿を描いた。それは、先行文献に記載された最初の欧米系のファンによる RPS より 37 年も早いものである。ただし、この二つの投稿は「実在の人物について描かれたファン・フィクション」として「RPS」とは言えるが、「生モノの関係の描写」とは程遠く、現在の RPS においても稀に見る一人の人物しか取り上げない作品である。このような違いはマスメディア環境、および宝塚歌劇における、生徒の「生の人間としての身体」と「メディアとしてのイメージ」の間の境界線の変化による結果と考えられるが、この点に関しては稿を改めて論じることとしたい。

4.2　宝塚歌劇ファンサイト S について

4.2.1　設立から移転まで

調査の対象となる宝塚歌劇の二次創作を専門対象とした会員制同人サイト S は、2020 年 7 月に、宝塚歌劇ファンの C 一人が作った非公式サイトである。2024 年 1 月 4 日時点で、サイト S は 2103 人の会員を擁し、500 本以上の投稿が掲載される。サイトの特徴としては、会員登録をすると、投稿と閲覧ができるようになるという自閉性を持っている。創立者の C は、2015 年の台湾公演のきっかけで宝塚歌劇のファンになり、宝塚歌劇の二次創作を始めた。二次創作の形式は小説で、最初に投稿したサイトは宝塚歌劇ファンサイト H とマイクロブログサービス LOFTER である。C の聞き取りによれば、サイト S の設立の背景には、規模が大きく、存続期間が長かったサイト H の閉鎖したという経緯がある。

サイト H は 2012 年末から 2018 年末まで運営され、「コンテンツ」（宝塚歌劇の著作権がある映像ファイルや雑誌のスキャンファイルなど、2017 年にサイトの運営側に取り下げられた）、「二次創作」、「フリーマーケット」（宝塚歌劇関連の取引に関する譲渡を行う場）、「雑談」という 4 つの主なセクションによって構成された。「閉鎖のお知らせ」によれば、運営を維持するため、サイト H の管理チームは運営期間中、合計 20 万円近く出資した。すでに閉鎖したため、サイト H の規模については不明だが、管理チームが SNS に投稿した運営停止のお知らせが 32 万回も閲覧されていることからもその大きさを窺える。このお知らせによれば、閉鎖の理由は 2018 年における「ファンダムの気風の変化」であった。「（サイトにおける）生徒に対して誹謗中傷をする一部のユーザー、沈黙する傍観者たち、そして匿名ユーザーによる無責任な発言に対して、管理チームはがっかりしました」という。管理チームは、2020 年にサイトを閉鎖することを決めたが、2018 年に、掲示板は外部からの監査を受けた時、管理チームの都合で監査に対応できる管理者がいなかったため、2018 年末をもって運営が終了した。

そこで、2020 年 2 月に、中国語圏のある RPS の人物設定が炎上の火種になり、前述した LOFTER を含む二次創作を扱う一部の中国のサイトにおいて一部の投稿がブロック・削除され始め、ファン作品アーカイブサイト「Archive of Our Own」へのアクセスも中国政府に遮断され、「227 事件」という騒動が発生した。C は、「宝塚の同人創作のコミュニティを存続させたい」、「ちゃんとした投稿ができるプラットフォームをなくしたくない」という思いでサイト S を設立した。最初、サイト S は二次創作、コンテンツ、雑談、管理業務という 4 つの主なセクションを備えたが、2023 年に、接続の不安定さを解消するため、新しいドメインへ移転した際に、「コンテンツ」セクションが廃止され、完全に二次創作を主体としたサイトになった。

初代サイト S は創設者 C が自力で構築したもので、新しいドメインへ移転した二代目サイト S に関

しては、ドメイン料金とレンタルサーバー料金は合計年額 9500 円程度である。サイト S はユーザー料金を課さないため、運営費用がすべて C の個人負担となる。サイト構築は、あるウェブエンジニアスキルを持つファンによって行われ、デバッグは、C の募集で集まった 25 人のボランティア（サイト S のユーザーでもある）により行った。二代目サイトの構築とデバックは、金銭的報酬がいっさい発生しないボランティア活動であるが、謝礼として、ボランティアのユーザーたちは、サイトの創設者の感謝の意を込めたデジタルバッジがもらえる。バッジの内容と模様はユーザー自身で決められ、それぞれの投稿に示されたユーザーネームの下に飾られ、当ユーザーの業績、職務、伝えたいメッセージなどを他のユーザーに提示している。つまり、サイト S の構築は、ファン・コミュニティによる完全なる非営利活動である。

4.2.2　サイトポリシー

サイト S の禁止事項として、生徒への誹謗中傷、盗作と無断転載、宝塚歌劇と無関係の発言、宝塚歌劇の著作権があるコンテンツを要求する行為、外部サイトへの誘導行為が挙げられる。ただし、誹謗中傷の項目には、「二次創作の人物設定としては誹謗中傷に該当しない」という追加説明がある。

二次創作に関するルールは「題材、設定、内容は原則として自由である。主人公の一人が宝塚歌劇の生徒であり、かつその人間関係の相手が広義の“人間”の形態であれば、それ以外の創作の自由は制限されない」こと。ただし、性に関する描写は、必ず「コメントやクリックの度に表示する内容」として設定しなくてはいけないと求められる。

また、読者がコメントする時のルールは、10 文字（句読点は除く）以上で、盗作、無意味の書き込み、重複投稿、過度の引用と句読点使用をしないことである。

4.3　サイト S に見られる宝塚歌劇の二次創作

初代サイト S が引っ越しをはじめてから、二代目サイト S の運営開始までで、このサイトの二次創作セクションには 343 件の投稿がある。これらの投稿には、イラストや未完成の小説が混在しているため、ここでは 253 件の完結した同人小説に絞り、創作内容の調査を行った。調査の結果、これらの二次創作の主な題材とカップリングの割合がわかった（表 1、表 2 参照）。

表 1　サイト S における二次創作（小説）の分類および作品数

分類	作品数	作品の背景	作品数
	238（94.1%）	宝塚歌劇	107
ナマモノ[7]		宝塚歌劇と関係ないあるいは未言及	131
半ナマモノ[8]	13（5.1%）		
その他	2（0.8%）	夢小説	2

7　生徒のみを扱う二次創作。

8　生徒が演じた劇中人物を扱う二次創作。

表2　サイトSにおける二次創作（小説）のカップリングおよび作品数

カップリングの対象	作品数	カップリングの種類	作品数
男役×娘役	74 (31.1%)	GL[9]	39
		BG[10]	35
男役×男役	155(65.1%)	GL	122
		BL[11]	20
		BG	8
		非恋愛もの	5（うちに性別未記述1）
娘役×娘役	1（0.4%）	GL	1
男役×男役と男役×娘役	3（1.3%）	GL、BL	3
その他	5（2.1%）	カップリングがない	5

その上、これらの二次創作の中で、性描写を含むものが156件で、全体の約61.7%を占め、あらゆる場合で性に関する表現を避ける宝塚歌劇との劇的な差が見られる。

V　調査結果の分析および考察

5.1　ジェンダー・セクシュアリティ・関係性および文芸の見識のコミュニケーション

それぞれの投稿者による説明文（注：二次創作の冒頭にある、本文のカップリング、苦手要素、創作のきっかけなどに関する事前説明）から、これらの二次創作が投稿されたきっかけは、自発的な投稿以外に、「他のユーザーへのプレゼント」、「（主人公の）生徒の誕生日（など）のお祝い」、「他のユーザーとのコラボレーション」などが見られる。たとえば、ある生徒の誕生日を祝うために、24名のファンの二次創作者がリレー形式で1時間ごとに順番投稿を行うイベントは、代表的な行事として挙げられる。そして、これらの特に優れた創作や、「コメントする度に表示する内容」のコメント欄には、読者から寄せられた感想文が多く見られる。

たとえば、ある男役×娘役カップリングのGLの創作者は、大正時代を背景に、「性別を偽る男装の麗人とその兄嫁の恋」を主題とした作品を投稿した。この作品において、創作者は和洋折衷の生活様式の描写と、陰翳に富む大正文学を彷彿とする作風を示している。さらに、創作者は耽美で悪魔主義的なスタイルで女性の同性愛を描いた谷崎潤一郎の『卍』から「夫に内証で外の男愛したら悪いやろけど、女が女恋いするねんよってかめへん。同性の間でなんぼ親しなったかて夫がそれとやかくい

9　「ガールズラブ」の略称。

10　男女カップリング（「ボーイ＆ガール」）の略称、日本では一般的に「NL」と言う。

11　「ボーイズラブ」の略称。

う権利あれへん」（谷崎　1931）を引用し、高度な文芸の教養を示している。この点は読者の評判を受け、さらにコメント欄で創作者と 20 世紀初期の日本文学に関する議論が行なわれている。このような文芸の見識の交流が富むコミュニケーションは、参加者に新しい情報、仲間同士との繋がり、自己顕示・自己肯定の機会などを提供している。このような特徴は、先行研究に見られる他の二次創作のコミュニティと共通している。

そのほか、ジェンダー・セクシュアリティの視座から見れば、このコミュニティは、ほかの社会的意味を持つと考えられる。拙論では、宝塚歌劇の二次創作者を対象とした聞き取り調査を通じて、「二次創作の方向性は作者自身が置かれる当時の状況、たとえばセクシュアリティ、人間関係、親密な関係に対する欲望など」（張　2023:238）に関係することが明らかになった。言い換えれば、二次創作者は、宝塚歌劇の生徒に対する自らの想像を書くことで、読者とジェンダー・セクシュアリティ・人間関係などの解釈を共有していると言えるだろう。ファンダム研究者の Henry Jenkins が指摘したように、インターネットの出現により、もともと明確に分かれた多種多様な集団はインターネットで合流している（Jenkins　2021）。サイト S の場合、二次創作の題材・内容から、創作者たちの間では明らかに異性愛者、レズビアンやバイセクシュアルなどが混在している可能性を示している。したがって、創作者の「人生、経験、需要、欲求に関連する意味」（Grossberg 2002=2009:136）を込められたテクストも、多様なダイナミックスによって「歌劇団側が提示する象徴的で寓意的な意味の数々を一度解体したあとで再構築」（Robertson 2000:185）されていると考えられる。

そして、読者は、テクストと二次創作者に再構築された生徒像を読むことで、自身の幻想や欲求などが投影される生徒の「メディアとしてのイメージ」に対する理解の再確認をする。コメント欄に見られる読者と二次創作者のやり取りの内容は、ほとんど二次創作の内容 —— 言い換えれば、互いの内面生活によって生成・読解されるテクスト —— に関する意見交換である。つまり、サイト S は、集団で形成された女性を中心とする、「自分自身のニーズ」に基づく多様なジェンダー・セクシュアリティ・関係性などに対する見方の交流が生まれる空間を生成し、多元的で共有できるジェンダー・セクシュアリティ・関係性などを認識・語る方法を提供すると言えるだろう。そしてこのようなコミュニティは、Adrienne Rich が提起した「レズビアン連続体」という概念を発展させると考えられる。Rich は「レズビアン」を「性的」概念から「非性的」概念へと拡大し、「女同士のもっと多くのかたちの一次的な強い結びつきを包み込んで、ゆたかな内面生活の共有、男の専制に対抗する絆。実践的で政治的な支持の与え合いを包摂」（Rich 1986=1989:87）する概念である「レズビアン連続体」と名を付けたが、レズビアンを脱性化させ、その特有の体験にも、「女」の歴史と文化の内部にある多様性や差異にも無頓着であると批判される（富岡　2002）。ところが、宝塚歌劇の二次創作によって生成するコミュニケーション空間は、もともと強制的異性愛によって分断された女性の性的実践や、これらの二次創作に触れたシスヘテロセクシャルのフェミニズム、レズビアンフェミニズムなどの視座の間を架橋している。それは、互いへの理解、および女性の連帯による異なる視座から男性中心社会やヘテロノーマティヴィティなど社会規範への再考を促進すると考えられる。

5.2　ジェンダー・セクシュアリティ・人間関係のあり方の手探り

宝塚歌劇における人間関係は、二人の特定の人物の間に限定されても、「特定の役」としての関係性、表舞台に立つ男役 / 娘役としての関係性、裏舞台にいる生徒としての関係性、そしてファンに見せないプライベートな関係という 4 つの関係を見出すことが可能なのである。前述した拙論では、二次創

作者が、「生徒本人と公式メディアが提供した“真実性を備える”情報、虚構空間の情報、ファンが作り出すイメージと現実とをリンクさせ、それぞれ違う割合で混ぜ合わせることで、生徒同士の関係性に新しい意味を付与する」（張　2023:239）ことを明らかにした。そこで、サイトSの二次創作におけるジェンダー・セクシュアリティと人間関係も、極めて多様なあり方を呈している。

表2で示すように、二次創作におけるカップリングは、宝塚歌劇の表舞台で上演される「男役と娘役による異性間の恋愛」だけではなく、ジェンダー・セクシュアリティなどの属性と婚姻・親族・先輩後輩など人間関係が遊ばれ、ヘテロノーマティヴィティや権力関係が含んだ性別二元制から外れるさまざまなあり方を織り出す。本項では、主要な二つのカテゴリー「男役×男役」と「男役×娘役」のカップリングに描かれた関係性に表れる特徴について分析する。

5.2.1　秩序のパラダイム撹乱

①　男役×男役

ここで、まず、恋愛に関しては「男女のロマンチックラブ」しか上演されない宝塚歌劇の二次創作において、実際に舞台で恋人同士として仲良くしている様子を観客に演じ見せる「公式コンビ」に比べて、男役同士の関係性がより創作の対象として扱われたという点がとくに興味深い。

ところが、男役同士の関係性が最も扱われたとはいえ、扱われたのはほとんど「男役スター」の間の関係性という点が見逃せない。一見、娘役の間の関係性を描く二次創作の数は少ないが、その理由はおそらく、ファンに注目される娘役たちは、ほとんど「男役を引き立てる役」として、ほかの娘役から分断され、互いの関係性を観客に見せる機会が少ないからである。一方、スターでない男役は、スポットライトに当たられない限り、その間の関係性もファンに認知されにくい。結局として、共演や行事でペアに組まれることが多かった男役スター同士と、舞台で恋人同士や夫婦を演じ、関係性が公式にも多く語れるトップコンビが二次創作の主な対象になる。

そして、男役・娘役により組まれたトップコンビの関係性に比べて、男役スター同士の関係性がより扱われている理由として、学年の近い男役スター、特にトップスター同士のカップリングが最も扱われる（71件）という点から見れば、生徒同士の間のよりバランスの取れた対等な権力構造が、二次創作者を惹きつける要素だと考えられる。このサイトに見られる男役同士のカップリングがBLに設定されたとしても、男性同士の関係性を恋愛化・性愛化する「やおい・BL」作品に見られた、「攻め受け」という、ヘテロノーマティヴィティにおける権力関係をなぞっている典型的なパターンはサイト内ではほとんど見られない。一部の男役同士GL創作では、戦前の「少女友愛小説」に見られた「先輩後輩」関係に従って「エス[12]」な関係性を語る作品が見られるが、相対的にバランスの取れた対等な関係、あるいは意図的に劇団の根本的な関係性 —— つまり生徒同士やファンクラブの行動に大きな影響を与える「年功序列」（張　2023）—— を弱化・転覆させる関係がほとんどである。

一方、読者のコメントから見れば、主人公の「攻め受け」や、「年功序列」にこだわる関係性の描写が読者に求められることは、ほとんど見られない。この点についても、2000年代に入ってから攻め受けの属性の差が大きくなった日本のBL作品（藤本　2003）と、攻め受けを固定しがちな人が多く、攻め受け関係を示すタグの表記に関しても度々炎上が起きた、アジア圏の（男性同士の関係性を扱う）やおい・BL読者群の傾向とは大きく異なっている。

さらに、男役同士の関係性を描く二次創作では、その同質性の高い身体性から、現在のやおい・BL

12　戦前の日本の少女・女学生同士の（疑似）恋愛的な強い絆、またはその関係性を描いた文学作品。

における身体表象とはまた異なる「ホモジニアスな身体表象」が表している。この点について、次節で詳しく説明する。

② 男役×娘役

一方、男役の役と生の生徒としてのジェンダーが異なるため、男役×娘役のカップリングは多様的な形態を表す。役のジェンダーを引き継ぐBGのコンテクストは、大きく3種類のタイプに分けられる。第一は、宝塚歌劇の公式メディアに現れるヘテロノーマティヴィティな人間関係を温存する「王子とお姫」タイプ。第二は、男役・娘役コンビにおける上下関係をなくし、対等なカップルタイプ。第三は、伝統的な恋愛関係におけるジェンダー秩序や語る主体を反転させるタイプの三種類に分けられ、それぞれ10本程度である。その中で、第二種と第三種のタイプにおいて、ヘテロノーマティヴィティな人間関係（恋愛、性愛、家族など）を撹乱、再解釈、あるいは否定するケースが多く見られる。たとえば、以下のような例が挙げられる。

①「一人の人間としてありたい」ヒロインは仕事場で「男主人公の彼女」と見られることを我慢できなく、大事な恋人との恋愛関係を解消し、仕事のパートナーの関係に戻った。
②男主人公は大人の男性オメガ[13]であり、ヒロインは女子高生でアルファである。ヒロインに噛まれた男主人公はヒロインと結婚しようとした。だが、ヒロインが彼を番（つがい）解除の手術に連れて行こうとしていることを知った。男主人公が高額の賠償金を要求してヒロインを脅すと、ヒロインは自分の両親に連絡し、その父が大金を出して対応した。そのうち、男主人公が「あなたの継母はこの子（ヒロイン）の母と元夫の間に生まれた娘」とヒロインの父に明らかにされた。
③ヒロインは結婚したが、アイドルの夢女子[14]をしている。
④男主人公がヒロインをナンパする。ヒロインは性行為の経験がなかったが、自らの意思で男主人公と短くて情熱的な恋愛を体験した。
⑤男主人公はお見合いで未成年者のヒロインに一目惚れしたが、自分が「ヒロインの人生を抑圧する一部になる」ことに不快を感じている。
⑥自分のあり方を自由に決めたいヒロインは自分の「純潔」に遠慮して性行為を控えめにする男主人公に「初体験ではない」と嘘をつく。
⑦ヒロインは母の愛人であるピアノ家庭教師との性行為を通じて、いつも「淑やかな娘」と自身に求める母と傲慢な家庭教師を辱めるつもりたったが、その心理が家庭教師に見抜かれて、このまま肉体関係を維持した。しかし、音楽の対話から二人の間に純愛が芽生えた。二人とも自分の複雑な気持ちを意識したが、恋愛関係まで進めない。家庭教師はヒロインの音楽の才能と自分の指導の限界を気づき、「あなたのことを永遠に見つめている」と誓って別れた。

13 「オメガバース（omegaverse）」という二次創作より発祥した世界観の設定である。男女のほかに、アルファ、ベータ、オメガという三つの「第二の性」がある。アルファは社会階層のなかで最高位に位置づけられ、身体的な性に関わらず他者を妊娠させることができるタイプであり、オメガは社会階層のなかで最下位に位置づけられ、身体的な性に関わらず妊娠することができるタイプである。そして、アルファにうなじを噛まれることで、オメガは自動的にアルファと「番（つがい）」という生理的関係を結び、以降はそのアルファとしか性行為できなくなるなどの設定がある。

14 キャラクターやアイドルなどとの恋愛を夢見る女性のこと。

宝塚歌劇の舞台で、娘役は男役の引き立て役として存在していたが、これらの、明らかに現代社会においてジェンダー・セクシュアリティをめぐる女性が直面する諸問題（あるいはそのパロディ）をテーマにした二次創作で、娘役はヒロインとして常に能動的である。一方、一人の役としても、一人の役者としても、関係性に常に主導権を握る男役は、これらの二次創作で実際よりも受動的な立場に置かれたり、ヒロインの利益のため思いやりのある行動を取ったり、ないし（通常女性が遭う）ジェンダーに基づくリスクに晒されたりなどが描かれている。

Janice Radway のロマンス小説研究によれば、女性は感情労働を求められる社会文化に身を置いているが、文化の非対称的なコンディショニング (symmetrical conditioning) によって男性パートナーから感情回復を得ることができない。ロマンス小説における男性キャラクターによる女性キャラクターへの思いやりは、このような感情的欠乏を補うが、そこに潜むのは「ヘテロノーマティヴィティによって構築された女性の心理構造」を満足するというダイナミックスである。つまり、これらのロマンス小説が満足するのは、女性観客が恋人、妻、母親など文化に与えられた社会的な身分を達成する時に感じた自己価値と関連している。そして、これらのストーリーもヘテロノーマティヴィティの必然性を再証明していると論じる（Radway 1991）。男性の関心を描写することによって女性の感情的要求を満足させるという仕組みは、上述した 3 種類のタイプの二次創作にすべて見られる。だが、第二種の「対等なカップルタイプ」と第三種の「異性愛秩序を反転させるタイプ」において、ヘテロノーマティヴィティが女性に与えた社会的アイデンティティ及びその規範自体が様々な疑問や破壊を受けている。このような疑問や風刺、破壊の描写が富む作品を読むことは、ヘテロノーマティヴィティが女性読者にもたらす社会的アイデンティティに関する感情的な需要に応えるには非常に効果が弱いと想像できるが、ジェンダー本質主義や、性差別とヘテロノーマティヴィティを両軸とする「正しいセクシュアリティ」（竹村　2002）、女性が不快に感じない関係性のあり方などの再考を促していると考えられる。

この点について、これらの二次創作の読者からの感想も窺うことができる。たとえば⑦のコメント欄には、ある読者が「多重関係（筆者注：母と娘 / 教師と生徒 / 男性と女性 / 成人と未成年）における弱者であっても見事に反撃を達成した」ヒロインに爽快感を感じると述べた。そして、伝統的な男性的な書き方における「広義の受への注意欠如」の傾向と、性関係で「受は多少なりとも抑圧される」という自身の慣性思考に関する反省を投稿した。このような革新性をもつ読解は明らかに既存のロマンス小説の書き・読みにおけるダイナミックスを広げていると考えられる。

5.2.2　身体描写

前述したように、サイト S における二次創作は、宝塚歌劇の多層的な構造で、極めて多様な視点から女性生徒同士の関係性を BL、BG、GL などの関係性へ再編成・再解釈をすることを可能にする。したがって、サイト S で、「決まりパターン」的な関係性を中心とするテクストと従来の型にはまらない関係性を中心とするテクストが混在する空間が生成している。特に、「女性による女性同士の関係性を扱う」ことが、これらのテクストに独特なダイナミックスを持たせる。

たとえば、前述の男性バンドの RPS を研究対象とした Busse は、女性創作者による男性の「身体イメージへの強い関心」を指摘する。また、二次創作者の Cesperanza がジェンダー・スワップ[15]を題材にした RPS に見られる女性創作者と男性キャラクターの間に起こる「互いのジェンダーを引き受けることで、同性への欲求にアクセスできるようになる」という見解を引用し、「女性による男性の

15　男性主人公を女性の体を持たせ、女性の身体と置かれた状況を体験させること。

RPS」のダイナミックスを明らかにしている（Busse 2006）。しかし、「女性による女性の RPS」として、サイト S における二次創作は上述と異なる特徴が見られる。たとえば、男役同士のカップリングにおける 20 本の BL のなかで、比較的詳細な身体描写を行なった作品は 4 本しかいないことが挙げられる。そして、これらの作品が身体描写を行う際に、「細長い」「細い」「洗練」「（肌）白い」「しなやかな」「美しい」「繊細」などの形容詞が多用される。それは、これらの創作における身体描写はメディアに示された男役の身体性を忠実に表現していることを表している。

しかし同時に、これは宝塚歌劇の役柄同士が、極めて同質性の高い身体性を持つということも意味している。すなわち、男役のメディアとしての身体は、細身で直線的な造形、娘役より高い身長、襟足がある短髪、切れ長の目など「美青 / 少年らしく」見なされる要素によって構成され、娘役は華奢な造形、男役より低い身長、長い髪、丸い目など「美少女らしく」見なされる要素によって構成される。このような意図的に選ばれ、演出された身体性は、従来の男性中心主義の二項対立的なジェンダー規範によって生まれ、その二分性が現実の社会より明確化されていると言えるだろう。しかし、同じ「男性同士の恋愛・性愛」を題材とする創作としても、身長の高低など外見的な要素が攻め受けの役割を視覚化するという記号化の程度が高い商業 BL（堀ほか　2020）における身体表象より、宝塚歌劇の役柄同士の同質性の高い身体性の方が桁違いの「ホモジニアスな表象」を作り出している。さらに、身体描写の欠如により、ジェンダーレスで身体性が希薄なテクストが生成されている。この点に関して、男役同士の BL だけではなく、男役同士の GL における身体描写においても、同じような身体性の同質化・希薄化も多く見られる。身体性へのまなざしに比べれば、奥行きのあるストーリーと、複雑な心の動きに関する表現が緻密と言えるほど多く見られる。二次創作者は、このようなテクストを通じて、すでに「モノ化」された、生徒の「メディアとしてのイメージ」を、再び「欲望の対象として、共感できる人として、あるいは“ありのまま”の」（Busse 2006:256）生徒として、生の人間らしく再構築する。

フェミニズムによる批判理論によって、「モノ化」という「人間、人（person）を使用や操作、鑑賞などの対象（object）であるモノ（thing）として扱うこと、またモノとして見なす」（江口　2019:101）現象、特に女性を性的に見る「性的モノ化」が批判される。BL の記号化により「モノ化」が行われる一方で、「関係性の重視やキャラクターの性格、内面的な特徴へのこだわりによって人格が重視されることになり、モノ化が退けられている」（堀ほか　2020:145）という現象も確認されている。上記の研究に照らして考えると、宝塚歌劇の二次創作は、記号化の弱化と関係性・キャラクターの内面の要素の重視を兼ね備えるという特徴を示している。このような異性愛規範に従う関係性とポルノグラフィから逸脱した特徴は、「記号」の中に落とし込まれた身体性と関係性、また女性読者の自己モノ化（self-objectification）などの問題の改善に啓発を促すと考えられる。

VI　調査結果の分析および考察

本論は、宝塚歌劇のファンサイト「サイト S」を主な調査対象として、宝塚歌劇の二次創作の歴史、ファンサイトの設立と運営の状況、ユーザー間のやりとり、および二次創作の内容という 4 つの視点に立ち、「女性による女性同士の関係性を扱う作品・コミュニティ」としての宝塚歌劇の二次創作とそのコミュニティの形成と特徴を探り、その社会的な意味と研究の展望を検討した。

まず、宝塚歌劇の機関誌『歌劇』の投稿欄「女学校宝塚通信」と「令女欄」の考察を通じて、宝塚

歌劇の RPS は、少なくとも 1930 年代の初頭から現れ、先行文献に記載された欧米系のファンによる RPS より 37 年も早いことがわかった。ただし、その題材と創作者の視点は現代の RPS とは大きく異なっている。

次に、宝塚歌劇の非公式ファンサイト S の考察を通じて、サイトの成立・運営の状況を考察し、サイト S の自閉性と非営利性を明らかにした。最後に、サイト S における宝塚歌劇の二次創作、および二次創作に関するコミュニティのやりとりを考察した。その結果、このコミュニティは、他の二次創作と共通する「参加者に新しい情報、仲間同士の繋がり、自己顕示・自己肯定の機会などを提供している」機能を持っていることを示した。そして、女性参加者の多様な生活経験は、二次創作やコメントの形で共有され、交換され、強制的異性愛によって分断された女性の性的実践や異なる視座によるフェミニズムへの関心の間に架橋をしていることが明らかになった。

最後に、サイト S における二次創作のテクストの考察を通じて、これらの二次創作の内容において、パロディなどの手法を通じて異性愛秩序や年功序列における権力関係を撹乱・反転するケースが多く見られることを確認した。また、男役同士の関係性を恋愛化・性愛化する二次創作では、心の動きなど内面の要素の重視と、異性愛秩序にはまる作品や商業 BL によく見られる「モノ化」とは異なる「身体性の同質化・希薄化」が見られる。このような特徴は、「記号」の中に落とし込めされた身体性と関係性、また女性の自己モノ化などの問題を揺るがせる可能性を感じさせるものと言える。

今後の研究の可能性として、「宝塚歌劇の二次創作における身体描写の分析」、および「RPS の題材の変遷から見る身体のメディア的変容」という二つの課題が挙げられる。具体的には、宝塚歌劇の二次創作が示す「身体性」に含まれる生徒の「表象」と創作者の「体験」がどのように関連つけられるのかということと、メディア技術とマーケティング戦略の進化が続く中、公式メディアとファンダムにおける生徒の「身体性」とファンのコミュニティがどのように変えられるのかを探っていきたい。

謝辞

本研究の一部は、神戸大学国際文化学研究推進インスティテュートの助成を受けたものです。ここで謝意を申し上げます。

参照文献

Busse, Kristina（2006）‘‘I’m Jealous of the Fake Me’: Postmodern Subjectivity and Identity Construction in Boy Band Fan Fiction’. *Framing Celebrity: New Directions in Celebrity Culture*, Edited By Su Holmes, Sean Redmond, London: Routledge, pp. 253-267.

Coccia, Emily (2022) ‘Femslash fan fiction’s expansive erotic imaginary’, *Transformative Works and Cultures*, Vol.38
https://journal.transformativeworks.org/index.php/twc/article/view/2205/3005(2024 年 1 月 29 日アクセス).

Grossberg, Lawrence (2002) ‘Is there a Fan in the House?: The Affective Sensibility of Fandom’=(2009)「這屋里有粉絲嗎？——— 粉都的情感感受力、『粉絲文化讀本』、陶東風編、北京大学出版社 .

Jenkins, Henry (1992) *Textual poachers: television fans & participatory culture*, London: Routledge.

Jenkins, Henry(2006) *Convergence Culture: Where Old and New Media Collide*=(2021)『コンヴァージェンス・カルチャー —— ファンとメディアがつくる参加型文化』、渡部宏樹・北村紗衣・阿部康人訳、晶文社 .

Martin, Fran (2012) ‘Girls Who Love Boys’ Love: Japanese Homoerotic Manga as Trans-National Taiwan

Culture'. *Inter-Asia Cultural Studies*, 13(3), pp. 365-383.
Radway, Janice (1991) *Reading the Romance: Women, Patriarchy, and Popular Literature*, Chapel Hill: The University of North Carolina Press.
Rich, Adrienne (1986）*Blood, Bread, and Poetry: Selected Prose* =（1989）『血、パン、詩。(アドリエンヌ・リッチ女性論)』、大島かおり訳、晶文社、pp.52-118
Robertson, Jennifer (1998) *Takarazuka* =(2000)『踊る帝国主義 —— 宝塚をめぐるセクシュアルポリティクスと大衆文化』、堀千恵子訳、現代書館
Thomas, Bronwen（2014）'Fans Behaving Badly? Real Person Fic and the Blurring of the Boundaries between the Public and the Private'. *Real Lives, Celebrity Stories: Narratives of Ordinary and Extraordinary People across Media*, edited by Bronwen Thomas and Julia Round, Bloomsbury, pp.171-185.
Villa-Montoya, Maria, Montoya-Bermudez, Diego and Escobar, Johanna (2019) El romance en el *femslash*: Un análisis narrativo del *fan fiction Una vez más, una oportunidad más, Anàlisi* 60, pp.65-79.
Welker, James (2006) 'Beautiful,Borrowed,and Bent:"Boys'Love" as Girls' Love in Shôjo Manga'. *Signs*, Vol. 31, No. 3, pp. 841-870.
Zhang, Kaixuan (2019) *A Semiotic Study on Character Pairing Fandom in Chinese Cyberspace*. Thesis (PhD). The Chinese University of Hong Kong.
Zhao, Jing(Jamie) (2017) 'Queerly imagining "Super Girl" in an alternate world: The fannish worlding in FSCN femslash romance'. *Transformative Works and Cultures*, Vol. 24
https://journal.transformativeworks.org/index.php/twc/article/view/870/820（2024 年 1 月 29 日アクセス）
東園子（2015）『宝塚・やおい、愛の読み替え —— 女性とポピュラーカルチャーの社会学』、新曜社.
江口聡（2019）「性的モノ化再訪」、現代社会研究 021、pp.101-114.
大塚英志（1989）『物語消費論 ——「ビックリマン」の神話学』、新曜社.
許冠文、張慧（2023）「" 嗑 CP": 青年女粉絲的創造性情感体験」、婦女研究論叢（175）、pp.102-116.
竹村和子（2002）『愛について』、岩波書店.
張嘉慧（2023）『宝塚歌劇における " 女同士の絆 "—— 雑誌・作品・聞き取りを通したファンと劇団における関係の研究 ——』、神戸大学国際文化学研究科博士論文（未公刊）.
陳怡禎（2016）『台湾ジャニーズファン研究』、青弓社.
鄭熙青（2021）「何謂融合文化工業 ——— 粉絲、同人与媒体資本」、中国図書評論（10）、pp.13-24.
富岡明美（2002）「レズビアン連続体」、『岩波 女性学事典』、井上輝子ほか編集、岩波書店、p487.
藤本純子（2003）「『ボーイズラブ』小説の変化と現在 —— 角川ルビー文庫 <1992 ～ 1995・2000 ～ 2003> 作品の比較分析から」、待兼山論叢（37）、pp.19-52.
堀あきこ、守如子編（2020）『BL の教科書』、有斐閣.
由富子（1931）「宵待草」、『歌劇』（127）、p39.

WEB 記事

AfterEllen.com Staff, Fiction Comes Out of the Closet　2006 年 1 月 4 日
https://afterellen.com/fan-fiction-comes-out-of-the-closet/（2024 年 1 月 29 日アクセス）.
Fanlore, RPF
https://fanlore.org/wiki/RPF（2024 年 1 月 29 日アクセス）.

青空文庫　谷崎潤一郎『卍』.
https://www.aozora.gr.jp/cards/001383/files/56873_62035.html（2024 年 1 月 29 日アクセス）.
椎名裕仁 「実在創作（ナマモノ）同人誌は本当に危険なのか？」 2016 年 5 月 23 日
https://417hirohito.wordpress.com/2016/05/23/nmmn/（2024 年 1 月 29 日アクセス）.